

**改訂レッドリスト
付属説明資料**

鳥類

平成 22 年 3 月

環境省自然環境局野生生物課

はじめに

「付属説明資料」は、平成 18 年 12 月及び平成 19 年 8 月に公表された改訂版レッドリストにおいて新規に掲載された種を基本に、それらの生息状況等を簡潔に解説したもので、本冊子は、その「鳥類」版です。

すでに刊行されているレッドデータブックと合わせて、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く活用されることが望れます。

改訂レッドリストの詳細については、以下の web ページを参照してください。

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=7849>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8648>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8886>

掲載種と解説内容

平成 18 年 12 月 22 日に公表された鳥類改訂レッドリストに掲載された 143 種・亜種のなかから、同リストにおいて新規掲載あるいはランク変更された 44 種・亜種について、以下の内容を簡潔に解説しました。なお、記載内容は原則としてレッドリスト公表時のものです。

- カテゴリー区分（新ランク及び[新規掲載]等の表記）
- 目名、科名
- 和名
- 学名、記載者名、記載年
- 生息状況等、以下の項目を簡潔に記載
 - 日本における固有性／形態と特徴／分布の概要／生息地の現況とその動向／存続を脅かしている原因とその種の危機の状況／保護対策
(存続を脅かしている原因は、できる限り記述の統一を図るために、原則として別表に挙げたタイプ区分を用いコードを付記した。)
 - 参考文献

■原因のタイプ区分表

森林伐採 11	湖沼開発 12	河川開発 13
海岸開発 14	湿地開発 15	草地開発 16
石灰採掘 17	ゴルフ場 21	スキー場 22
土地造成 23	道路工事 24	ダム建設 25
水質汚濁 31	農薬汚染 32	

園芸採取・観賞用捕獲・狩猟 41	薬用採取 42
その他不法採集など 43	踏みつけ 51
捕食者侵入 52	管理放棄 53
遷移進行・植生変化 54	火山噴火 55
帰化競合 56	異種交雑・放流 57
産地局限 61	近交化進行 62
不明 99	その他 71

執筆

執筆はつぎの方々にお願いし、執筆者名を種ごとの記載の末尾に明記しました。

石田 健(東京大学大学院農学生命科学研究科)

尾崎清明 (山階鳥類研究所保全研究室)

梶田 学

金井 裕 (日本野鳥の会サンクチュアリ室)

川路則友 (森林総合研究所北海道支所)

関 伸一 (森林総合研究所九州支所)

永田尚志 (新潟大学超域研究機構)

花輪伸一 (世界自然保護基金ジャパン)

藤巻裕蔵 (帯広畜産大学名誉教授)

柳澤紀夫 (日本鳥類保護連盟)

綿貫 豊 (北海道大学大学院水産科学研究院)

今後の対応

環境省では、レッドリストや本冊子について広く普及を図ることで、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存への国民の理解を深めるとともに、関係省庁や地方公共団体等に配布することにより各種計画における配慮等を促す予定です。

また、レッドリストの掲載種の中で特に保護の優先度が高い種については、さらに生息状況等に関する詳細な調査の実施等により情報収集を行い、その結果及び生息・生育地域の自然的・社会的状況に応じて「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づく国内希少野生動植物種に指定する等、必要な保護措置を検討します。

なお、レッドリストは、今後とも、5 年ないし 10 年ごとに再調査と見直しを行う必要があるものと考えられます。

ミズナギドリ目 ウミツバメ科

CR (絶滅危惧 IA類) [←VU]

クロコシジロウミツバメ *Oceanodroma castro* (Harcourt, 1851)

スズメ大のやや小型のウミツバメで、全身やや光沢のある黒色で腰は白い。大西洋のいくつかの孤島、太平洋ではハワイ、ガラパゴス、日本の繁殖地が知られている。三陸沿岸の、1ないし2島で繁殖し、繁殖地では夜行性で、地面に直径数センチ程度の巣穴を掘って営巣する。その生息個体数は1,200程度と見積もられ、ここ10年程度の間に急速に減少している。同地域で増加しているオオミズナギドリの営巣の影響があるらしい。各地の沿岸に飛来する。

【参考文献】 9)、42)

執筆者：綿貫 豊（北海道大学水産科学研究院）

タカ目 ハヤブサ科

CR (絶滅危惧 IA類) [←EN]

シマハヤブサ *Falco peregrinus furuitii* Momiyama, 1927

全長雄約38cm、雌約46cm。硫黄列島北硫黄島にのみ留鳥として生息するハヤブサの固有亜種である。標本の採集が行われたのは1920年代から1930年代のみで最近の調査はなく、生息状況の実態はわかつていない。太平洋戦争時に環境が激変していることから、すでに絶滅している可能性もある。分布域が極めて限られている(61)ことからCRに改めた。

【参考文献】 34)

執筆者：金井 裕（日本野鳥の会サンクチュアリ室）

ツル目 クイナ科

CR (絶滅危惧 IA類) [←EN]

ヤンバルクイナ *Gallirallus okinawae* (Yamashina & Mano, 1981)

全長約35cm、無飛力のクイナとしては世界でもっとも北に分布する。沖縄島北部のやんばる地域のみに生息する日本固有種。1981年に発見、新種として記載された。1990年頃から生息域に侵入してきた外来種マングースの影響などにより、分布域と個体数を減じており、推定個体数は1986年の1,500～2,100羽から、2005年には580～930羽と約60%の減少となっている。出現範囲が100km²未満と推定され、個体数とともに過度の減少が見られ、さらに継続的な減少が予測されることからCRに改めた。外来種の駆除事業と人工増殖計画が進められている。

【参考文献】 39)、40)

執筆者：尾崎清明（山階鳥類研究所保全研究室）

チドリ目 シギ科

CR (絶滅危惧 IA類) [←EN]

ヘラシギ *Eurynorhynchus pygmeus* (Linnaeus 1758)

全長14.5cm、シギの仲間としては最小型のグループ。嘴の先が横に平たいヘラ型をしている。繁殖羽と非繁殖羽の羽衣をもつ。シベリア極北の東北部であるチエコト半島からカムチャツカまでの限られた地域のツンドラ地帯で繁殖し、インド、タイ、ミャンマーなど南アジアや、マレーシアなど東南アジアの沿岸に渡って越冬する。海岸や河口の干潟や砂浜に生息する。日本には春秋の渡りの季節に通過するが、その個体数は少ない。近年の渡来記録の減少は著しい。日本における砂浜海岸の減少も、個体数減につながっている可能性も考えられる。

【参考文献】 2)、6)、21)、22)、35)、43)

執筆者：柳澤紀夫（日本鳥類保護連盟）

ハト目 ハト科

CR (絶滅危惧 IA類) [←EN]

アカガシラカラスバト *Columba janthina nitens* (Stejneger, 1887)

全長 40cm。カラスバトの小笠原諸島父島、母島、姉島に留鳥として生息する固有亜種である。過去に硫黄列島にも生息していたとされるが、最近の記録はない。森林内で果実や種子を採食する。季節により島間を移動する。生息域での森林の減少が激しかったことに加え、ノネコによる食害（52）や、食物となっている種子がクマネズミに採食されてしまうなど、生息条件の悪化が予測される。生息数が極めて少なく、かつ今後も減少するおそれがあるため、CRに改めた。

【参考文献】 23)

執筆者：金井 裕（日本野鳥の会サンクチュアリ室）

スズメ目 モズ科

CR (絶滅危惧 IA類) [←VU]

チゴモズ *Lanius tigrinus* Drapiez, 1828

全長約 18.5cm。平地から低山帯の林縁に生息する夏鳥である。繁殖地域は日本、朝鮮半島、中国東部で、越冬地は中国南部、スマトラ、フィリピンとされる。1970 年代には局地的な分布となっていたが、東京の郊外など都市近郊にも生息していた。第2回および第5回・第6回自然環境保全基礎調査の鳥類繁殖分布調査を比較したところ生息確認メッシュ数が 48 から 10 へと激減し、生息状況が悪化していることが明らかとなった。繁殖個体数の減少と生息地の分断化が進んでいると考えられるため CR に改めた。

【参考文献】 20)

執筆者：金井 裕（日本野鳥の会サンクチュアリ室）

スズメ目 ホオジロ科

CR (絶滅危惧 IA類) [←NT]

シマアオジ *Emberiza aureola ornata* Shulpin, 1928

スズメ大の小鳥で、夏羽の雄では、頭上と背面は茶色、顔は黒く、胸と腹は黄色。雌の背面は茶褐色に黒褐色の縞があり、胸と腹は黄色。5月中旬に北海道に渡来して草原や湿原で繁殖し、秋には東南アジアに渡って越冬する。繁殖期には昆虫食である。近年の調査により、繁殖期の生息数が 1970 年代後半から 1990 年代後半までに北海道各地で激減したことが明らかになり、現在もその状況が継続している。生息数減少の原因は明らかではない。

【参考文献】 20)

執筆者：藤巻裕蔵（帯広畜産大学名誉教授）

ミズナギドリ目 ウミツバメ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←VU]

クロウミツバメ *Oceanodroma matsudaireae* Kuroda, 1922

やや大型のウミツバメで、全身くすんだ黒色で、翼前部に白斑がある。小笠原諸島のごく限られた数の島の地面に巣穴を掘って営巣する。小笠原諸島でのみ繁殖が確認されている日本固有種。繁殖地のうちの 2 つは比較的大きい。その 1 つで近年繁殖が確認されておらず、クマネズミによる食害（52）の影響が考えられる。本州中部に稀に飛来する。

【参考文献】 41)、50)

執筆者：綿貫 豊（北海道大学水産科学研究院）

ペリカン目 ウ科

EN (絶滅危惧 IB類) [新規掲載]

ヒメウ

Phalacrocorax pelagicus pelagicus Pallas, 1811

ウミウより一回り小さく、全身金属光沢のあるやや緑がかった黒色で、繁殖期には目の周りの赤、頭頂の飾り羽、下腹部両脇の白、が目立つ。ベーリング海を含む北部北太平洋に分布する。北日本の孤島などの岸壁の岩棚に少数で営巣する。繁殖地は北海道を中心に5か所以下、繁殖個体数は250羽以下であり、現在もその状況が継続している。非繁殖期には日本各地の沿岸にふつうに見られる。

【参考文献】 38)、51)

執筆者：綿貫 豊（北海道大学水産科学研究院）

コウノトリ目 サギ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←NT]

ミゾゴイ

Gorsachius goisagi (Temminck, 1835)

日本固有繁殖種で、本州、四国、九州及び伊豆諸島などで繁殖する。南西諸島には渡りの時期に通過し、一部は越冬する。個体数は1,000羽未満との報告もあるが繁殖分布を含め十分に把握されていない。しかし保護収容個体数の推移を見ると、1960年以降全国で継続的に減少しており、とくに1990年以降は顕著であることが明らかになった。最近の個体数減少は50%以上と推定されることからENとなった。その原因是主たる繁殖地である里山の開発や、越冬地での森林減少(11)などが考えられる。ハシブトガラスによる卵の捕食や、伊豆諸島では外来種のイタチの影響(52)も推測される。

【参考文献】 25)、29)

執筆者：尾崎清明（山階鳥類研究所保全研究室）

タカ目 タカ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←VU]

リュウキュウツミ

Accipiter gularis iwasakii Mishima, 1962

小型の猛禽類であるツミの固有亜種で、八重山諸島の石垣島と西表島に留鳥として生息する。琉球諸島の与論島の記録もある。琉球諸島で近年のツミの記録があるが、亜種の特定はされていない。生息範囲が限られており、生息個体数も少ないと考えられるので、ENに改めた。

【参考文献】 34)

執筆者：金井 裕（日本野鳥の会サンクチュアリ室）

タカ目 タカ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←VU]

チュウヒ

Circus spilonotus spilonotus Kaup, 1847

湿性草地に生息する猛禽類である。本州から北海道のヨシ原で少数が繁殖し、冬季には大陸より飛来し越冬する個体が多い。冬季は特定の場所に集まってねぐらをつくる。繁殖地やねぐら場所の干拓や埋め立て(15)、ヨシ焼き、釣り人による搅乱が生息状況に影響を与えておりおそれがある。日本における繁殖個体数は、数十羽と考えられるのでENに改めた。

【参考文献】 34)

執筆者：金井 裕（日本野鳥の会サンクチュアリ室）

ツル目 クイナ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←VU]

オオクイナ

Rallina eurizonoides sepiaria (Stejneger, 1887)

全長約 25cm。頭部から胸が赤褐色で背面暗褐色。下面是黒色で白い横縞がある。種としては南アジアや東南アジア、フィリピン、台湾に分布。本亜種は八重山諸島に留鳥として分布する日本固有亜種で、亜種の中で最大。沖縄島北部にもわずかな記録がある。個体数に関する資料は見当たらないが、生息地面積が少なく分断されており、個体数などの継続的減少が予測されることから、EN に改められた。野生化したネコやイヌの存在や(52)、シロハラクイナの分布域拡大による餌の競合も懸念される(56)。

【参考文献】 49)

執筆者：尾崎清明（山階鳥類研究所保全研究室）

ツル目 クイナ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←VU]

シマクイナ

Coturnicops noveboracensis exquisitus (Swinhoe, 1873)

小型のクイナで、ロシア南東部、中国東北部で繁殖するが局地的。日本では本州以南で越冬するが稀である。2003 年と 2004 年に青森県で繁殖期に複数個体が確認されたことから、国内での繁殖の可能性がある。越冬場所や数に関する情報は乏しく、定期的な渡来地も知られていない。世界の個体数は 10,000 羽以下と推定されているが、国内では 250 羽未満と考えられることから、EN に改められた。なお、ここでは日本鳥類目録と同様に北アメリカに生息する基亜種と同種としているが、独立種 *C.exquisitus* として扱うこともある。

【参考文献】 32)

執筆者：尾崎清明（山階鳥類研究所保全研究室）

チドリ目 シギ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←CR]

コシヤクシギ

Numenius minutus Gould, 1841

全長 31cm。日本におけるシャクシギの仲間 (*Numenius* 属) としては、最小種。東シベリア・極東の北部ツンドラ地帯で繁殖し、ニューギニア、オーストラリアなどの草原で越冬する。日本では春秋の渡りの季節に少数が通過するのみである。海岸近くの丈の低い草原、畑などで見られることが多い。通過個体数は少ないが、日本における記録個体数は増えている。バードウォッチャーの増加によるものと考えられる。

【参考文献】 6)、21)、22)、43)

執筆者：柳澤紀夫（日本鳥類保護連盟）

ブッポウソウ目 ブッポウソウ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←VU]

ブッポウソウ

Eurystomus orientalis calonyx Sharpe, 1890

全長 30cm、頭部は黒褐色、体は青緑色で、翼の初列風切羽に大きな白斑がある。嘴は赤色で幅広い。脚も赤色。4月下旬～5月中旬に主に本州以南に渡来し、低山帶の針葉混交林、落葉広葉樹林のほか、社寺林にも生息し、樹洞、巣箱、建物の隙間などに巣をつくって繁殖する。昆虫食である。営巣に適した樹洞のある大径木の減少、生息地の社寺林の減少、採餌環境の減少(11、23)などにより生息環境が悪化している。一部の地域では巣箱架設による保護対策がとられている。

【参考文献】 11)、13)、33)

執筆者：藤巻裕蔵（帯広畜産大学名誉教授）

スズメ目 モズ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←NT]

アカモズ *Lanius cristatus superciliosus* Latham, 1801

全長約 20cm。中国東部、サハリンと日本に夏鳥として渡来し、東南アジアで越冬すると考えられている亜種である。第2回および第5回・第6回自然環境保全基礎調査の鳥類繁殖分布調査を比較したところ生息確認メッシュ数が79から21へ激減していることが明らかとなった。各地で生息数が減少しており、とくに生息密度の高い北海道で減少率が高い場所があることからENに改めた。

【参考文献】 20)

執筆者：金井 裕（日本野鳥の会サンクチュアリ室）

スズメ目 ツグミ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←VU]

ホントウアカヒゲ *Erithacus komadori namiyei* (Stejneger, 1887)

日本固有亜種。スズメ大の小鳥で、背面は橙色、腹部は灰白色で、オスでは顔から胸にかけて黒い。沖縄島北部の常緑広葉樹林で繁殖する。留鳥。過去には沖縄島中部以南、慶良間諸島でも記録がある。ミトコンドリアDNAの分析結果では、基亜種アカヒゲ (*E. k. komadori*) とは遺伝的にも明確に分化した集団であった。繁殖地域がごく限られること加え(61)、移入種（ジャワマングース）の分布拡大に伴う密度低下が報告されており、現在もその状況が進行している(52)。国指定天然記念物、国内希少野生動植物種に指定されている。

【参考文献】 36)、45)

執筆者：関 伸一（森林総合研究所九州支所）

スズメ目 ツグミ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←VU]

アカコツコ *Turdus celaenops* Stejneger, 1887

全長約 23cm。伊豆諸島とトカラ列島に分布する固有種である。トカラ列島で生息個体数は少ない。男女群島、屋久島での最近の状況は不明。伊豆諸島では留鳥だが、冬季に一部の個体が伊豆諸島南部の島や伊豆半島へ移動している可能性が高い。主要な生息地であった三宅島で、外来生物であるイタチの増加により生息数が激減したことと、2000年の噴火後(55)の火山ガスにより生息環境である森林環境の回復が十分でないことから、ENに改めた。

【参考文献】 46)

執筆者：金井 裕（日本野鳥の会サンクチュアリ室）

スズメ目 ウグイス科

EN (絶滅危惧 IB類) [←VU]

ウチヤマセンニュウ *Locustella pleskei* Taczanowski, 1889

スズメ大の小鳥で、尾羽が長く、背面はベージュ色、下面是汚白色。朝鮮半島・九州近海・紀伊半島周辺のいくつかの島と伊豆七島の島嶼にのみ夏鳥として渡来して繁殖し、非繁殖期はインドシナ半島に渡り越冬する。三宅島を除く各島嶼の繁殖個体数は80羽以下である。しかし、かつて繁殖記録のある八丈島、青ヶ島、利島では、近年、確認されておらず(54)、三宅島雄山山頂の繁殖地が2000年6月の噴火により消失し(55)、本種の最大の個体群であった三宅島の生息数が600羽から300羽へと半減した。

【参考文献】 8)

執筆者：永田尚志（新潟大学超域研究機構）

スズメ目 シジュウカラ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←VU]

ナミエヤマガラ

Parus varius namiyei Kuroda, 1918

全長約 14cm。伊豆諸島の利島、新島、神津島に留鳥として生息するヤマガラの固有亜種である。本州に生息する亜種ヤマガラ (*P. v. varius*) より体が大きくて褐色みが強く、伊豆諸島南部に生息する亜種オーストンヤマガラ (*P. v. owstoni*) との中間的な形質を持つ。生息地が限られ生息数が少ないと、生息環境である常緑広葉樹の面積が少なく今後の増加も見込めないことから、ENに改めた。

【参考文献】 7)

執筆者：金井 裕（日本野鳥の会サンクチュアリ室）

スズメ目 ミツスイ科

EN (絶滅危惧 IB類) [←VU]

ハハジマメグロ

Apalopteron familiare hahasima Yamashina, 1930

全長約 13cm。メグロは、小笠原諸島の留鳥として生息する固有種である。亜種ハハジマメグロは母島、向島、妹島の3島に生息する。聟島列島や父島に生息していた亜種ムコジマメグロは絶滅したとされる。小笠原諸島では移入種であるメジロとの競合やノネコによる捕食(52)があるとされる。生息場所が極めて限定され、向島、妹島の個体数は少ないと、ENに改めた。

【参考文献】 27)、28)

執筆者：金井 裕（日本野鳥の会サンクチュアリ室）

コウノトリ目 サギ科

VU (絶滅危惧 II類) [←NT]

ズグロミゾゴイ

Gorsachius melanolophus (Raffles, 1822)

全長は約 47cm。上面は赤褐色、頭頂が黒色で黒色の冠羽がある。国外ではインドからタイ、ボルネオ、フィリピン、台湾、中国南部に分布する。国内では宮古・八重山諸島に留鳥として分布するが、石垣島と西表島以外の島での個体数は極めて少ないと推定される。生息地面積が狭く、個体数などの継続的な減少が予測されることからVUに改めた。卵の捕食者であるハシブトガラスの増加や、餌の競合する外来種インドクジャクの存在の影響が懸念される。

【参考文献】 26)

執筆者：尾崎清明（山階鳥類研究所保全研究室）

タカ目 タカ科

VU (絶滅危惧 II類) [新規掲載]

サシバ

Butastur indicus (Gmelin, 1788)

日本、朝鮮半島、中国東部で繁殖し、南西諸島、中国南部、東南アジアで越冬する。日本では東北南部から近畿地方にかけてが主要な生息域である。生息数はまだ少くないが、関東南部では各地で生息数が激減し、第2回および第5回・第6回自然環境保全基礎調査の鳥類繁殖分布調査の比較でも生息確認メッシュ数に減少傾向がある。また渡り中継地での記録数に継続的な減少傾向が見られる。主要な生息環境である水田と森林が複合する里地環境の悪化傾向があり、今後も改善が難しいと考えられることから、VUとした。

【参考文献】 20)、47)

執筆者：金井 裕（日本野鳥の会サンクチュアリ室）

ツル目 クイナ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

ヒクイナ

Porzana fusca erythrothorax (Temminck & Schlegel, 1849)

全長 23cm、頭部から胸、腹部上部にかけて赤茶色、背、翼は暗褐色、体後部の下面に黒と白の横斑がある。嘴は黄褐色で、脚は長く赤色。繁殖期には北海道、本州、四国、九州に分布し、北方で繁殖したものは冬に南に渡る。水田や水辺の草地に生息し、おもに水生動物などを食べる。宅地開発、圃場整備、水田の乾田化(23)などにより生息環境が消失したり、悪化している。

【参考文献】 12)、20)、34)

執筆者：藤巻裕蔵（帯広畜産大学名誉教授）

チドリ目 シギ科

VU (絶滅危惧II類) [←EN]

アマミヤマシギ

Scolopax mira Hartert, 1916

南西諸島固有種。全長約35cm、ふ蹠長43~50mm、体重220~460g。羽色は褐色、翼の羽根に小暗色斑、頭頂に黒い横縞。過眼線と頬線はほぼ平行。胸から腹に細い褐色の横縞、ずんぐりとし、尾と脚は短く、くちばしは先が少し下に曲がり長く太い。ヤマシギとの主な識別点は、本種の方が嘴や脚が長くて太く、やや水平に体を保ち、カモのような声を発する、等。奄美大島、加計呂麻島、徳之島などの山地から平地で繁殖し、奄美以南沖縄島まで越冬する。影響を受けていた外来種マンガースの駆除が進み、生息地の森林も回復傾向にある。

【参考文献】 2)、15)、16)、17)、22)

執筆者：石田 健（東京大学大学院農学生命科学研究所）

チドリ目 セイタカシギ科

VU (絶滅危惧II類) [←EN]

セイタカシギ

Himantopus himantopus himantopus (Linnaeus, 1758)

全長37cm。脚がきわめて長く、赤色をしていて目立つ。1960年頃まではごく稀な種であったが、その後の渡来記録が増え、越冬も記録された。1978年には千葉県で巣卵が発見され、以降は東京湾沿岸地域では繁殖している。現在では北海道から沖縄県まで全国から渡来記録があり、渡来記録も個体数も増加傾向にある。場所によっては数十羽で越冬しているのを見ることもある。海岸の干潟、湖沼畔、湿地、水田などに生息している。

【参考文献】 6)、21)、22)、34)、43)

執筆者：柳澤紀夫（日本鳥類保護連盟）

チドリ目 カモメ科

VU (絶滅危惧II類) [←NT]

ベニアジサシ

Sterna dougallii bangsi Mathews, 1912

全長約31cm。中型のアジサシで、頭は黒く、背と翼上面は灰色、そのほかは白い。夏には嘴と足が赤いが冬にはいずれも黒から褐色になる。西部太平洋および大西洋の熱帯亜熱帯、インド洋に分布する。日本では夏鳥であり、福岡県から沖縄県まで、小島や岩浜で繁殖する。繁殖場所はやや不安定で、同一年で確認される繁殖地数は10程度である。場所によって観光などによる攪乱が見られる。本州、九州の沿岸に稀に飛来する。

【参考文献】 —

執筆者：綿貫 豊（北海道大学水産科学研究院）

ヨタカ目 ヨタカ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

ヨタカ

Caprimulgus indicus jotaka Temminck & Schlegel, 1844

全長 29cm、体全体が褐色、灰白色、黒色、黄土色のまだら模様をしている。嘴は根元で幅広く、脚は短い。4～5月に北海道、本州、四国、九州に渡来し、疎林、森林内の伐開地、農耕地内の残存林などに生息し、地上にほとんど巣材を敷かないで産卵する。夕方から夜間に飛びながら大きな口を開き昆虫を捕らえて食べる。近年の調査によると、全国的に分布域が縮小し、生息数が減少している。生息数減少の原因は明らかではない。

【参考文献】 10)、11)、20)

執筆者：藤巻裕蔵（帯広畜産大学名誉教授）

キツツキ目 キツツキ科

VU (絶滅危惧II類) [←EN]

オーストンオオアカゲラ

Dendrocopos leucotos owstoni (Ogawa, 1905)

奄美大島の固有亜種。全長約 30cm、翼長 152.5±2.9mm(n=22)、背面は黒く、翼に小さい白斑を有する。頬から胸にかけて濃褐色、腹部は赤く、太い黒色縦斑を有する。嘴は黒灰色。雄の頭部は赤い。オオアカゲラの亜種の中で最大で、もっとも暗色。奄美大島のみで繁殖が確認されている。1960 年代～1980 年代に営巣に適した大径木のある高齢の照葉樹林が伐採 (11) されて減少し分断化された。生息状況の変化は見られないが、林道の延長整備に伴いハシブトガラス等の捕食者 (52) が林内に侵入しやすくなり、とくに若鳥の死亡率増加が懸念される。

【参考文献】 2)、15)、16)、22)

執筆者：石田 健（東京大学大学院農学生命科学研究科）

スズメ目 ツグミ科

VU (絶滅危惧II類) [←CR]

オオトラツグミ

Zoothera dauma major (Ogawa, 1905)

奄美大島のみで繁殖する固有亜種。全長約 30cm、翼長 160～165mm(n=5)。くすんだ黄褐色ないしオリーブ色で、羽軸周辺が白く先端の黒い羽毛の斑模様に全身覆われている。腹部は淡色、尾羽は黒っぽい。尾羽が 12 枚 (亜種 トラツグミは 14 枚)。湿潤な林床の照葉樹社齡林のみに生息し、繁殖期には夜明け前の短時間に独特の声で一斉にさえずる。この時期に 1999 年から同様に実施されている全島調査によると、繁殖期のさえずり個体数は 250 を超える程度と少ないが、数と分布域は 2005 年から増加傾向にあると期待される。

【参考文献】 1)、2)、15)、16)、22)、48)

執筆者：石田 健（東京大学大学院農学生命科学研究科）

コウノトリ目 サギ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

ヨシゴイ

Ixobrychus sinensis sinensis (Gmelin, 1789)

全長約 35cm の小型のサギ。上面は茶褐色で下面は淡黄褐色で縦斑がある。インドから東南アジア、中国にかけて分布。日本では北海道から九州まで夏鳥として繁殖し、琉球列島では越冬する。千葉県で標識されたヒナが 1 月にフィリピンのルソン島で回収されたことがある。個体数が減少していると考えられて NT となつたが、全国的な現状の把握はされていない。繁殖環境として湖沼や河口域のヨシ原などを必要とし、こうした環境の保全が必要である。越冬地での狩猟圧 (41) の影響も懸念される。

【参考文献】 3)

執筆者：尾崎清明（山階鳥類研究所保全研究室）

コウノトリ目 サギ科

NT (準絶滅危惧) [←DD]

カラシラサギ *Egretta eulophotes* (Swinhou, 1860)

全長約 65cm。全身白色で、繁殖期にはコサギより短めの換羽が生じる。雌雄同色。朝鮮半島、中国で繁殖し、中国、フィリピン、マレーシア、スマトラ、ボルネオなどで越冬する。離島や海岸の岩礁、崖地などで繁殖している。日本ではほぼ全国から記録はあるが、九州、対馬、沖縄地方などに記録が多い。海岸の砂浜、河口などで見られることが多い。1986年には石川県で営巣が見られたが、繁殖は成功しなかった。近年繁殖地域で保全が行われており、個体数が増加している傾向があり、日本においても渡来地数、観察個体数も増加傾向にある。

【参考文献】 2)、21)、22)、34)

執筆者：柳澤紀夫（日本鳥類保護連盟）

カモ目 カモ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

カリガネ *Anser erythropus* (Linnaeus, 1758)

全長約 58cm。マガソによく似た形、色彩、生態をしており、体はやや小さい。嘴の基部の白色が成鳥では頭頂まで達している。アジアでは、シベリア極北部のツンドラで繁殖し、日本、朝鮮半島、中国などで越冬する。日本では北海道（春秋に通過）と本州で主に記録されている。明治期以前の渡来状況は不詳であるが、1960年代にはほとんど渡来がなかったが、1974年にマガソ、ヒシクイ、コクガソが天然記念物に指定され、狩猟鳥から除外された。これをきっかけに3種の渡来数が増え、ことにマガソの渡来数が増加するようになってから、それに混じって少數だが渡来が見られるようになった。現在では宮城県、島根県などでは定期的に渡来している。

【参考文献】 2)、18)、22)、34)

執筆者：柳澤紀夫（日本鳥類保護連盟）

タカ目 タカ科

NT (準絶滅危惧) [←VU]

オオタカ *Accipiter gentilis fujiyamae* (Swann & Hartert, 1923)

1980年代は確認生息数が500羽以下であり、密猟による繁殖の失敗の報告もありついでいた。環境省は、1996年に「猛禽類保護の進め方」をとりまとめ、オオタカについても生息地の開発計画などへの保全対策を求めてきた。環境省（2006）によるオオタカ保護指針策定調査で確認された繁殖つがい数は、912から1140となり、成熟個体数は約2000羽以上とされた。また、個体数の減少傾向も見られないことから、VUから除外することとなった。ただし、主な生息地域である山麓部分では依然として開発圧力が高いことから、NTとした。

【参考文献】 19)

執筆者：金井 裕（日本野鳥の会サンクチュアリ室）

キジ目 キジ科

NT (準絶滅危惧) [←DD]

ウズラ *Coturnix japonica* Temminck & Schlegel, 1849

全長20cm、体全体に褐色、黄土色、茶色のまだら模様で、雄では頬から喉にかけて赤茶色。北海道、東北地方、本州中部で繁殖し、それ以南ではおもに冬に生息する。低地の河川敷の草地、農耕地、伐採跡地など開けた環境に生息し、地上に巣をつくる。繁殖地では1980年代後半以降に観察頻度が著しく減少し、全国的にも1970年代前半から狩猟捕獲数が減少している。生息数の減少要因として生息地の悪化やキツネなどの捕食者の増加が考えられるが、具体的には明らかではない。

【参考文献】 11)、31)、37)

執筆者：藤巻裕蔵（帯広畜産大学名誉教授）

キジ目 キジ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

アカヤマドリ

Syrmaticus soemmerringii soemmerringii (Temminck, 1830)

日本固有亜種（種全体として日本固有種）。大きさ、羽色ともにコシジロヤマドリに類似するが、腰と上尾筒の白色を欠くのが特徴である。分布は福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県中北部および宮崎県中北部とされるが、コシジロヤマドリとの分布境界ははっきりしない。広葉樹林だけでなく針葉樹植林地もよく利用する。全体の個体数が不明だが、狩猟統計によれば分布地での平成17年度捕獲数は雌の捕獲が禁止された1975年の4~17%まで減少している。分布域が九州中北部と限られていること、長期にわたって個体数の減少傾向が見られることから、生息条件の変化によっては絶滅危惧種に移行する可能性のあるNTに相当する。

【参考文献】 30)

執筆者：川路則友（森林総合研究所北海道支所）

スズメ目 シジュウカラ科

NT (準絶滅危惧) [←VU]

オリイヤマガラ

Parus varius olivaceus (Kuroda, 1923)

全長14cm。日本固有亜種。雌雄同色で、頭、喉が黒色、額、頬、後頸が栗色、胸、腹部が赤褐色、体側はオリーブ色を帯び、背面が灰褐色である。八重山諸島の西表島にのみ分布し、山地の常緑広葉樹林に留鳥として生息する。調査が少なく詳細は不明であるが、分布域が限られ個体数も少ない個体群として重要である。島の中央部の森林地帯が、西表国立公園特別地域、森林生態系保全地域に指定されているため、森林伐採などの環境改変は行われていない。そのため、生息地の環境は維持され、分布域、個体数とも比較的安定した状態にあると考えられる。

【参考文献】 —

執筆者：花輪伸一（世界自然保護基金ジャパン）

カモ目 カモ科

DD (情報不足) [新規掲載]

オシドリ

Aix galericulata (Linnaeus, 1758)

カモ類の中では小型で、夏羽の雄ではオレンジ、紫、緑など派手な色で、銀杏羽が特徴的。雌と冬羽（エクリップス）の雄は灰褐色。繁殖期はおもに本州中部以北、非繁殖期には沖縄から北海道まで分布する。針葉樹人工林の増加により主要な食物であるドングリのなる樹種の減少や越冬地となる水域の減少（54）など生息環境が悪化・減少している。越冬数は2万羽前後であるが、繁殖期の生息数に関する資料は少ない。

【参考文献】 5)

執筆者：藤巻裕蔵（帯広畜産大学名誉教授）

チドリ目 シギ科

DD (情報不足) [←EN]

チシマシギ

Calidris ptilocnemis kurilensis (Coues, 1873)

全長21cm。オバシギ属（*Calidris*）としては中大型種。繁殖羽と非繁殖羽の羽衣をもつ。アジア極東の北部である北千島・コマンドル諸島で繁殖する。繁殖分布が極めて狭い。越冬地については不明な部分が多い。日本では冬鳥として北海道、本州北部で少数が記録されているのみ。石川県、千葉県（銚子、盤州干潟）、北海道（納沙布岬、霧多布岬、襟裳岬など）などで1974年以降に少数が記録されているが、近年の渡来が途絶えている。干潟や砂浜海岸で見られることは少なく、磯海岸で見られていることが多いので、一般バードウォッチャーからの目撲記録が集まりにくい種ではある。

【参考文献】 6)、21)、22)、43)

執筆者：柳澤紀夫（日本鳥類保護連盟）

スズメ目 ツグミ科

DD (情報不足) [←CR]

ウスアカヒゲ *Erithacus komadori subrufus* (Kuroda, 1923)

スズメ大の小鳥で、頭上、翼、背面、尾羽は明るい赤褐色、額から顔と喉は黒色、腹と脇は白色で脇に黒斑がある。額の黒色部の幅が広い事と背面の色が淡い点で他亜種と異なると考えられている。八重山諸島で雄1個体の記録があるのみ。八重山諸島に留鳥と考えられていたが、これまで確実な繁殖記録は1例もなく、単に他の亜種が越冬している可能性が高い。したがって、ウスアカヒゲの繁殖地は知られておらず、それどころか亜種としての存在自体が疑問視されている。このため、ランクを判定するための情報が圧倒的に不足している。

【参考文献】 24)、44)

執筆者：梶田 学

タカ目 ハヤブサ科

ランク外 [←DD]

オオハヤブサ *Falco peregrinus pealei* Ridgway, 1874

日本鳥類目録では、迷行記録種とされているので、レッドリストから除外することとした。

【参考文献】 34)

執筆者：金井 裕（日本野鳥の会サンクチュアリ室）

キツツキ目 キツツキ科

ランク外 [←VU]

アマミコケラ *Dendrocopos kizuki amamii* (Kuroda, 1922)

分布が奄美諸島に限られ、従来は、主な生息環境である森林の伐採が進んでいたために個体群の縮小が懸念され、VUとされていた。しかし、1990年代から奄美諸島での森林伐採は低下し、高温多湿な気候に恵まれて森林の更新が活発なこと、海風による枯れ枝の発生も本種の採食環境として適していること、また任意観察とセンサス調査の結果から生息域で常時生息と繁殖が確認されることなどから、すぐに絶滅が懸念され、緊急対策が必要な状態ではなくなりたと判断されたので、判定基準にも照らしてランク外となった。

【参考文献】 16)、22)

執筆者：石田 健（東京大学大学院農学生命科学研究科）

スズメ目 カラス科

ランク外 [←VU]

ルリカケス *Garrulus lidhti* Bonaparte, 1850

分布が奄美大島と近隣に限られ、従来は、生息環境の森林伐採が進み、侵略的外来種のマンゴースによる捕食が報告されて個体群の縮小が懸念され、VUとされていた。しかし、1990年代から森林伐採は低下し、気候に恵まれて森林の更新が活発なこと、2000年から実施されたマンゴース防除事業が成果をあげていること、任意観察とセンサス調査の結果から生息域全体で常時生息と繁殖が確認されることなどから、すぐに絶滅が懸念され、緊急対策が必要な状態ではなくなりたと判断されたので、判定基準にも照らしてランク外となった。

【参考文献】 2)、15)、16)、22)

執筆者：石田 健（東京大学大学院農学生命科学研究科）

付属説明資料 鳥類 参考文献

- 1) 奄美野鳥の会(執筆担当、石田健), 2008. オオトラツグミ (*Zoothera (dauma) major*) のさえずり個体数の変動(1999～2007). *Strix* 26: 97-104.
- 2) Birdlife international, 2001. Threatened Birds of Asia Part A -Birdlife international Red Data Book-. Birdlife international, Cambridge. 1516pp.
- 3) 遠藤公男, 2003. 「夏鳥たちの歌は、今」と「その後」. バーダー, 17(6): 36-37.
- 4) 藤巻裕蔵, 2000. 北海道鳥類目録 改訂2版. 帯広畜産大学野生動物管理学研究室. 83pp.
- 5) 藤巻裕蔵, 2006. 日本のオシドリー形態・分布・生態一. 日本オシドリの会, 美唄. 89pp.
- 6) 藤岡エリ子, 1997. シギ・チドリ全国カウント報告書1994年春. 日本湿地ネットワーク シギ・チドリ委員会, 名古屋. 272pp.
- 7) 藤田薫ほか, 2004. 伊豆七島のヤマガラ3亜種の個体数推定. 日本鳥学会2004年度大会要旨.
- 8) 藤田薫・藤田剛・富岡辰先・山本裕・樋口広芳, 2005. 希少鳥類オーストロヤマガラとウチヤマセンニュウの2000年三宅島噴火前後の個体数変化. *Strix*, 23: 105-114.
- 9) Hasegawa, H., 1984. Status and conservation of seabirds in Japan. In: JP Corxall, PG Evans, RW Schreiber (eds.), Status and Conservation of the World's Seabirds, ICBP Technical Publication No. 2., pp. 487-500. International Council for Bird Preservation, Cambridge.
- 10) 樋口広芳, 1999. 夏鳥の減少実態研究報告. 東京大学渡り鳥研究グループ, 東京. 110pp.
- 11) 樋口広芳・森岡弘之・山岸哲, 1997. 日本動物大百科4 鳥類II. 平凡社, 東京. 180pp.
- 12) 平野敏明・君島昌夫・小堀政一郎・小堀脩男・志賀陽一, 2003. 栃木県におけるヒクイナの生息状況(2002). *Accipiter*, 9: 1-9.
- 13) 飯田知彦, 2001. 人工構造物への巣箱架設によるブッポウソウの保護増殖策. 日本鳥学会誌, 50: 43-45.
- 14) 石田健, 2007. ルリカケス巣箱を使う. あまみやましき(奄美野鳥の会誌), 70: 16-20.
- 15) 石田健, 2007. 奄美大島のマングース2007年春の状況と今後の動向. あまみやましき(奄美野鳥の会誌), 71: 11-16.
- 16) 石田健, 2007. 新レッドリストにおける奄美の鳥—オオトラツグミさえずり個体一斉調査の意義一. あまみやましき(奄美野鳥の会誌), 69: 7-11.
- 17) 石田健・高美喜男・斎藤武馬・宇佐見依里, 2003. アミヤマシギ (*Scolopax mira*) の相対生息密度の推移. *Strix*, 21: 99-109.
- 18) 環境省自然環境局, 2004. 第35回ガンカモ科鳥類の生息調査報告書. 環境省自然環境局. 389pp.
- 19) 環境省自然環境局, 2005. オオタカ保護指針策定調査報告書. 環境省自然環境局. 94pp.
- 20) 環境省自然環境局生物多様性センター, 2004. 種の多様性調査 鳥類繁殖分布調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田. 343pp.
- 21) 環境省自然環境局生物多様性センター, 2006. 平成17年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業(モニタリングサイト1000)シギ・チドリ類調査業務報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター. 158pp.
- 22) 環境省自然環境局野生生物課(編), 2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—2鳥類. 自然環境研究センター, 東京. 278pp.
- 23) 関東森林管理局東京分局, 2004. アカガシラカラスバト希少野生動植物種保護管理対策調査報告書. 関東森林管理局東京分局. 70pp.
- 24) Kawaji, N. and H. Higuchi, 1989. Distribution and status of the Ryukyu Robin *Erythacus komadori*. J. Yamashina Inst. Ornith., 21: 224-233.
- 25) 川上和人, 2002. ミゾゴイが絶滅する日. 野鳥, 67(6): 13-15.
- 26) Kawakami, K. and M. Fujita, 2005. The distribution of Malayan Night Heron *Gorsachius melanolophus* in Yaeyama and Miyako Islands, southern Japan. Ornithol Sci, 4: 73-79.
- 27) Kawakami, K. and H. Higuchi, 2002. Bird predation by domestic cats on Hahajima Island, Bonin Islands, Japan.

Ornith. Sci., 1: 143-144

- 28) Kawakami, K. and H. Higuchi, 2003. Interspecific interactions between the native and introduced White-eyes in the Bonin Islands, *Ibis*, 145: 583-592
- 29) 川上和人・樋口広芳, 2003. 日本の低山に生息するミゾゴイ *Gorsachius goisagi*, オオタカ *Accipiter gentilis*, サシバ *Butastur indicus* の個体数推移の推定 (英文). 山階鳥類学雑誌, 35 : 19-29.
- 30) 川路則友, 2004. 九州のヤマドリ —狩猟による生死の分かれ目—. 森林科学, (41): 54-58
- 31) 木村正雄, 1991. 野生ウズラのツキ網獵および日本における野生ウズラの捕獲羽数の推移に関する考察. 日本家禽学会誌, 28: 166-169.
- 32) 宮彰男・三戸貞夫・蛇名純一・関下斎, 2005. 仏沼干拓地で繁殖期に観察されたシマクイナについて. 日本鳥学会誌, 54: 104-107.
- 33) 中村浩志, 2004. 鮎れ、ブッポウソウ. 山と渓谷社, 東京. 199pp.
- 34) 日本鳥類目録編集委員会 (編), 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広. 345pp.
- 35) 新浜俱楽部, 1988. 新浜の鳥—1966年～1968年の記録. 新浜俱楽部, 東京. 257pp.
- 36) 沖縄県文化環境部自然保護課, 2003. 平成14年度特殊鳥類等生息環境調査 (ホントウアカヒゲ生息実態調査) 報告書. 沖縄県文化環境部自然保護課. 12pp.
- 37) 奥山正樹, 2004. 狩猟鳥 *Coturnix japonica* の現状. 山階鳥類研究所報告, 35: 189-202.
- 38) Osa, Y., and Y. Watanuki, 2002. Status of seabirds breeding in Hokkaido. J. Yamashina Inst. Ornithol., 33: 107-141.
- 39) 尾崎清明・馬場孝雄・米田重玄・金城道男・渡久地豊・原戸鉄二郎, 2002. ヤンバルクイナの生息域の減少. 山階鳥研報, 34: 136-144.
- 40) 尾崎清明, 2005. ヤンバルクイナの分布域と個体数の減少. 遺伝, 59: 29-33.
- 41) 佐藤文男, 2001. 消えたクロウミツバメ. 山階鳥研ニュース, 143: 3.
- 42) 佐藤文男・鶴見みや古, 2003. オオミズナギドリによるクロコシジロウミツバメの巣穴破壊を防ぐ、金網を用いた営巣地保全にむけての試み. 山階研究所研究報告, 34: 325-330.
- 43) 世界自然保護基金ジャパン, 2004. シギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査報告書. 世界自然保護基金ジャパン, 東京. 200pp.
- 44) Seki, S-I. and T. Ogura, 2007. Breeding origins of migrating Ryukyu Robins *Erithacus komadori* inferred from mitochondrial control region sequences. Oribol. Sci., 6: 21-27.
- 45) Seki, S-I., M. Sakanashi, N. Kawaji and N. Kotaka, 2007. Phylogeography of the Ryukyu Robin (*Erithacus komadori*): population subdivision in land-bridge islands in relation to the shift in migratory habit. Mol. Ecol., 16: 101-113.
- 46) 高木昌興・樋口広芳, 1992. 伊豆諸島三宅島におけるアカコッコの環境選好とイタチ放獣の影響. *Strix*, 11: 47-57.
- 47) タカの渡り全国ネットワーク, 2003, サシバ別構グラフ : <http://www.gix.or.jp/~norik/hawknet/hawknet0.html>
- 48) 高美喜男・藤本勝典・川口和範・川口秀美・石田健, 2002. オオトラツグミ *Zoothera major* の初めて観察された巣立ちまでの営巣経過2例. *Strix*, 20: 71-77.
- 49) Taylor, B. and B. Perlo, 1998. Rails. Pica Press, East Sussex. 600pp.
- 50) 塚本洋三, 1984. 南硫黄島の鳥類. 南硫黄島の自然, pp. 249-285. 日本野生生物研究センター, 東京.
- 51) 綿貫豊・近藤憲久・中川元, 1988. 北海道周辺における海鳥繁殖地の現状. 鳥, 37: 17-32.

和名索引

アカガシラカラスバト	CR	3	シマアオジ	CR	3
アカコッコ	EN	6	シマクイナ	EN	5
アカモズ	EN	6	シマハヤブサ	CR	2
アカヤマドリ	NT	11	ズグロミゾゴイ	VU	7
アマミコグラ	ランク外	12	セイタカシギ	VU	8
アマミヤマシギ	VU	8	チゴモズ	CR	3
ウスアカヒゲ	DD	12	チシマシギ	DD	11
ウズラ	NT	10	チュウヒ	EN	4
ウチヤマセンニュウ	EN	6	ナミエヤマガラ	EN	7
オオクイナ	EN	5	ハハジマメグロ	EN	7
オーストンオオアカグラ	VU	9	ヒクイナ	VU	8
オオタカ	NT	10	ヒメウ	EN	4
オオトラツグミ	VU	9	ブッポウソウ	EN	5
オオハヤブサ	ランク外	12	ベニアジサシ	VU	8
オンドリ	DD	11	ヘラシギ	CR	2
オリイイヤマガラ	NT	11	ホントウアカヒゲ	EN	6
カラシラサギ	NT	10	ミヅゴイ	EN	4
カリガネ	NT	10	ヤンバルクイナ	CR	2
クロウミツバメ	EN	3	ヨシゴイ	NT	9
クロコシジロウミツバメ	CR	2	ヨタカ	VU	9
コシャクシギ	EN	5	リュウキュウツミ	EN	4
サシバ	VU	7	ルリカケス	ランク外	12

改訂レッドリスト 付属説明資料

鳥類

平成 22 年 3 月

編集・発行 環境省自然環境局野生生物課

エコマーク認定の再生紙を使用しています。(古紙含有率 100%)